
「ロスト・イン・ハリウッド」

ココナツ・サム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ロスト・イン・ハリウッド」

【Nコード】

N8355D

【作者名】

ココナツ・サム

【あらすじ】

旅行の終わりにハリウッドに立ち寄ったトオルは、ひょんなことから事件に巻き込まれる。ところが運命のいたずらか、どんどん予測のつかない方向に……。トオルはどこに行ってしまうのか？

今日はツイてる。

何の気なしに入ったバーで飛び切りの女と知り合った。

歳は二十五くらいかな。金髪で青い目の腰のくびれた女だ。

おまけに見るよ、どうだ、店を出て俺についてくるじゃないか。

ひよっとしたら売春婦なのかもしれないが、日本じゃとてもじゃないがこんないい女とは出会えない。まだ金は残っているし、少しくらいなら払ってもかまわないな。

アメリカを旅して一カ月ちよつとになるが、こうなってみるとハリウッドを最後の滞在地に選んで正解だった。この街には女優とかモデルのタマゴとかがごろごろしているんだろうが、この女もその一人だろうか。これだけの美人だったらいつか世の中に出ることだろう。

考えてみたら会社をリストラされて旅行することを思いついてニューヨークに降り立って以来、女つ気が一切なかったからな。

もちろん、バックパックを背負ってユースホステルや安宿を泊まり歩いて、移動は夜行バス、髪も髭も伸び放題だったから女が近寄ってくるはずもない。やっぱり今日床屋で髭を整えてもらってよかった。もしかしたら髭がラッキーなのかもしれないから、日本に帰ってもこのまま伸ばしておこうかな。

日本に帰るまであと一週間ある。西海岸の陽気と青い海を楽しんで帰るつもりだったけど、思っていたより楽しく過ごせそうだ。

その店はハリウッド大通りの東側のはずれに近いところ、あと半ブロックくらい行けばフリーウェイという所にあった。街の真ん中には派手な電飾をつけたバーが何軒もあったが、そういうところは店に合わせたのか客も派手で、どうも気後れがした。それに、音楽も

外まで聞こえるくらいうるさかった。

そのままふらふらと歩いていたら、割と落ち着いた感じの店を見つけたのでのぞいてみたというわけだ。

古いジャズっぽい音楽が流れて、店の中は木造りだがそれほど高級そうな作りでもない。客層も結構若い奴がいて、ここなら落ち着いて遊べそうだった。

店を出た俺たちは、歩きながら話した。

「ねえ、トオルは何の仕事してるの？」

「いや、普通の会社員だったんだけどリストラされてね。なかなか仕事が見つからなくて、今は失業保険もらってる。日本に帰ったらまた仕事探さなきゃ。」

「日本人だったらカラテとかできるの？強い？」

「キャサリン、日本人が皆カラテをやっているわけじゃないんだよ。俺はそっち系はまったくだめだなあ。子供の頃からケンカの際は逃げ回ってた口さ。」

「ふうん。でも、日本って綺麗な国なんでしょ？あたし、一度行ってみたいの。ニンジャとかゲイシャとかサムライとかにも会ってみたい。あ、日本と言えばフジヤマよね。スシ、テンプラ、テリヤキも好き。」

「ああ、俺はニンジャには会ったことがないけど、ゲイシャになら会えるかもしれないな。でも、多分日本に来たらがっかりするよ。」

「どうして？」

「東京はまるでニューヨークみたいだからさ。」

ハリウッドは華やかなイメージが先行しているが、メインの通りをちょっと外れれば、意外と安い宿がある。

ユースホステルばかり渡り歩いてきたが、ここでは結構ゆっくり滞在できるのでモーテルに泊まることにしていた。値段はそれほどかわらない。一週間で400ドルだ。まあ、値段が値段なのでお世辞

にも綺麗とは言えないが、ちゃんとしたベッドとシャワーとトイレがあつて、一応鍵もかかる。シートも代えてくれる。ユースホテルとの差額分の快適さはある。

とは言え、正直なところこんな所に女の子を連れてくるのはちよつと恥ずかしい。でも、こんなことは予想してなかったんだからしょうがない。

ハリウッド大通りから15分ほど山の方に歩いて俺のモーテルに着いた。途中の酒屋でビールも買った。俺ももうすぐ30歳になるのに、写真つきの身分証明書（ID）を見せると言われたのには驚いた。さっきのバーでは何も言われなかったのに。結局キャサリンのIDでビールを買った。

モーテルに帰って、ビールを飲んで二人でゆっくりした時間を過ごしてのんびりしていた時だ。時計の針はもう1時を回っていたが、突然ドアがノックされた。いや、ノックという表現は正しくない。激しく殴りつけているような音だった。

同時に叫ぶような声が聞こえた。

「キャサリン、ここにるのは分かってるんだ！出て来い！ここを開ける！」

「早く開ける！でないと、ドアを叩き破るぞ！」

「お前がここに男としけこんだのは分かってんだよ！さっさと開ける！」

おいおい、一体何が起こったというんだ？

「キャサリン、あれ、誰？」

「あの声はボビーね。ずっとあたしにつきまといてるのよ。きっと手下か何かが見てたのね。やばい奴だから気をつけたほうがいいわ。逃げましょう。」

そうこう言っている間にもドアは激しく叩かれている。ドアノブをバールか何かで叩いているようだ。こいつ、本当にドアを破って入ってくる気だ。信じられない。

「さあ、向こうの窓から！急いで！」

「ちよつと待って。ズボンをはくから。」

「ズボンなんてどうでもいいわ。」

よくない。パンツで表を走るわけにはいかないだろう。それじゃ変態だ。

やっとズボンに両足を入れた時、とうとうドアを破られた。

「この野郎！キャサリンに手を出しやがって！」

ボビーと呼ばれるその男は、言うなり殴りかかってきた。

なるほどこいつはやばそうだ。顔もゴツイが体もゴツイ。こんな奴に殴られたら一瞬であの世行きだ。

「ひゃーっ！」

俺は変な声を出しながらとりあえず立ち上がって避けてみた。が、しまった！ズボンを半分しかはいてないから、ちゃんと立ち上がれない。

転んだ俺は、自然とボビーの足元に倒れこんだ。

「うわっ！」

足元を払われた形になったボビーは前のめりになり、テレビの方に倒れた。

鈍い音がした。テレビ台に思い切りぶつかったらしい。やばいよ、これで発狂しなければいいけど。

あれ？こいつ、動かないぞ。

「今のうちよ。早く逃げましょう。」

「ちよつと待つて。こいつ、動かないよ。それに血が出てる。頭でもぶつけたんじゃないか。」

「大丈夫。ほつといて逃げましょう。」

「でも、死んじゃうかも。」

「こいつはこのくらいじゃ死なないわ。さあ早く。意識が戻らないうちに逃げるのよ。」

キャサリンに手を引かれて、モーターから逃げ出した。

「でもあなた、すごいね。あのボビーを一発でのしちゃうなんて。」

「いやいや、あれはたまたま俺が足元に転がって、あいつが勝手につまづいて転んで頭をぶつただけだ。そうでなかったら、今頃俺は八つ裂きにされてるよ。」

「ふうん。日本人はやっぱり奥ゆかしいのね。」

キャサリンは俺が意識的にやったと思っていろいろらしい。冗談じゃない、あんなゴツイ奴、武器を使っただって勝てるもんか。

「でもどうしてキャサリンはボビーに追われてるんだ？」

「追われてるわけじゃないのよ。あいつ、あたしのことが気に入ってるみたいで、俺の女になれてしつこいのよ。あたしが他の男と居ると、いつも邪魔をしに来る。今日だって、別にあいつの女でも何でもないのにドアまで壊して入って来たでしょ？まったく迷惑だったらありやしない。」

「あれは邪魔というより、殺されるところだったよ。」

「ああ、何人かはあたしの知らないところで殺されてると思うわよ。あいつってそういう奴だもの。」

「ちよつと待つて。じゃ、俺、今度見つかったら殺されない？」

「大丈夫よ、あなたはあれだけ強いんだもの。でも、銃には気をつけたほうがいいわね。いくらトオルでも銃にはかなわないわ。」

「俺、どうしよう・・・。」

「とりあえずあたしのところに来るといいわ。服も買ってあげる。好きなだけ居ていいわよ。」

いや、そういうことじゃないんだけどな。

泊まる所の心配をしてるんじゃないくて、命の心配をしてるんだ。

キヤサリンは妙にニコニコして俺の腕にぶらさがっているけど、こりゃあ早く日本に帰っちゃった方がいいかな。

あ！パスポート！

パスポートを部屋に置いたまま逃げて来ちゃった！

翌日、こつそりとモーテルに戻ってみた。パスポートだけは失くすわけにはいかない。

ボビーの手下とかが居るかも知れないから、慎重にしなければな。

少し離れたところから覗いてみると、ボビーの手下らしい奴はいなかったが、代わりに警察が居た。

俺が泊まっていた部屋の周りには黄色いテープが張り巡らしてある。やっぱりボビーはあのまま死んだのか？

だとしたら、俺、人殺し？しかも逃亡犯？

少し近づいて、集まっていた野次馬に聞いたみた。

「何かあったの？」

「夜中に争うような声がして、朝になったらドアが壊れてて中の荷物も人も居なくなってたらしいよ。カーペットに多量の血痕があったって。泊まり客は日本人らしいって言うから、強盗にでもあったのかねえ。」

やれやれ、俺、知らない間に事件に巻き込まれてる。

キヤサリンの部屋に帰って、今聞いてきたことを話した。

「今ちようどローカルニュースでやってたわよ。荷物もボビーの死体もなくなってたって事は、きつとボビーの手下が片付けたのね。」

“死体”って。死んでることに決めてるじゃないか。

「うそうそ。ボビーがあれくらいのことですぐ死ぬわけじゃない。

それより、今頃きつとボビーの手下達が血まなこになってトオルを探してるわよ。」

「だろうなあ。捕まる前に早く日本に帰りたいんだけど、パスポートも荷物ごと持っていかれたらしい。」

「今頃もう売り飛ばされてるわよ。日本人のパスポートは高く売れるからね。」

「じゃあ日本領事館に行つて一時渡航証明書をもらつてくるしかないなあ。ダウンタウンの方にあるんだっけ？」

「私にはよく分からないわ。でも、今行つたらまずいんじゃない？ 多分もう事件のことは伝わってるだろうから、根掘り葉掘り聞かれるわよ。」

「それもそうだな。じゃあ、どうしたらいいかなあ・・・。」

「ほとぼりが冷めるまでここに居ればいいのよ。大丈夫、奴ら、バカだから見つかりっこないわよ。」

ところがボビーについて詳しい話を聞いて震え上がった。

ハリウッドを二分する大ギャング団のボスで、子分は数百人もいるらしい。いわゆる武闘派で、あちこちでいさかや抗争を起こしている。

銃やナイフなんて当たり前だし、手下には人を殺すことなんて何とも思つてないような奴がごろごろしているという。

ボビー自体は刑務所に入ったことはないが、それも身代わりを立てているというもっぱらの噂で、今ではボビーのために代わりに手を下すという奴が何人もいるらしい。

どうしよう。

そんな奴に睨まれちゃったのか。見つかったら即さらわれて海にでも沈められちゃうのかな。

「やっぱり俺、日本に帰る。」

「無理よ。ちよつと時間を置かなきゃ。それに、日本領事館の周りだつてボビーの手下が張っているかも知れないじゃない？」

「じゃあ、他の州に逃げる。」

「お金もないのに？」

「貸してくれよ。」

「お断り。ここに居るんならいいけど、お金を貸したらいなくなっちゃうんでしょ？ ねえ、ここに居てよ。」

考えてみたら他の州に行つたところで金もなければ住む所もない。

大体、パスポートがなければどうせ身動きは取れない。
ビザなしで来てるけど、三カ月までは居られるはずだ。ほとぼりが
冷めるのを待つて領事館に一時渡航許可証つてのを取りに行こう。
後は、日本に電話をして何とかして金を送ってもらうか。それまで
は、ヒモみたいで気が進まないけどキャサリンの世話になろう。

キャサリンはかなりいいマンションに住んでいた。ハリウッド大通りからほど近い七階建てのマンションで、オートロックのセキュリティつきだ。部屋は広い1LDKで、中は白を基調としたセンスのいい家具でまとめられている。ここなら街に出るにもすぐだし、かといって大通りの喧騒は聞こえない。住民も裕福そうな人が多い。彼女が何の仕事をしているのか分からないが、普段は殆ど家に居る。夜時々電話がかかってきてごそごそ話しているが、早口なので俺には分からない。暮らし向きは結構余裕があるようだが、表に出ないで出来る仕事って一体何だろう。

その日は珍しくキャサリンが外出した。

普段彼女が外出している時は、俺は見て分からないテレビを流しながらボーっとしているのだが、もうあれから十日くらい経つからそれにも飽きていた。

あれ以来何事もないし、この広いロサンゼルスで俺一人を見つけるのもそう簡単ではないだろう。俺は日本人観光客だし、もう日本に帰ったと思っているかも知れない。

俺は出かけてみることにした。ハリウッド大通りを越えて南側に十分ほど歩けばバス通りがある。そこからサンタモニカ行きのバスに乗った。ここまで来ていてサンタモニカを見ない手はない。

平日の昼間なのでバスは空いていた。

窓側に座った俺は外の景色を見ながらのんびりとバスに揺られていた。

何となく周りの景色が開けてくる。道路際にはやしの木が植えられ、空も何となく抜けているような感じがした。

バスを降りてみると、ハリウッドとは気温が数度違うのだろう、海風とあいまって涼しく爽やかだ。空はどこまでも青く、街の景色も

色鮮やかに感じる。歩く人々も心なしか軽い足取りに見える。

バス停から半ブロックほど歩くと有名なサントモニカの桟橋がある。当たり前だが、テレビで見たのと同じだ。写真を撮りたいところだったが、スーツケースごと失くした俺は当然カメラも持っていないかった。桟橋の横からビーチへと降りていった。

それにしてもこのビーチは広い。海岸線に沿って南北に伸びている長さもすごいのだが、波打ち際から砂浜が切れるところまでの幅がすごいのだ。つまり、縦横ともに日本のビーチとはスケールが違う。

砂浜の真ん中に自転車道路がある。自転車だけでなくローラースケートに乗っている人も沢山居て、まさに西海岸のイメージだ。本来なら俺もこういうことを楽しんで、今頃は日本に帰っているはずだったのに。

やっと海の側まで来た俺は、その辺にタオルを置いて、とりあえず海に足をつけてみた。

うわ、冷たい。これは泳ぐのは無理かなあ。まあいい、オイルを塗って甲羅干しをすることにしよう。

波の音を聞いているうちに、いつの間にかうとうとしていたらしい。時計を見ると二時間くらい経っている。ちょっとお腹も空いてきた。どこかその辺で軽く食べて、そろそろ帰ろう。キャサリンも帰ってくるかも知れない。

海から街へは本当に近い。来た道、つまりバス通りを確認しながらサントモニカの街に出た。

レストランは沢山あるけれど、それほどしっかり食べたいわけじゃない。コーヒーとホットドッグくらいで十分だ。

テラス席がある小さなカフェを見つけると、そこに入ってみた。それほど高くもなさそうだ。キャサリンにもらっていたから金はあつ

たが、何となく人からもらった金で遊ぶのは気が引ける。

コーヒーはやはり薄かったが、ハーフでオーダーしたサンドイッチは結構いけた。軽く流れるサーフミュージックと潮風、久し振りに観光気分を満喫できた。

ちよつと気分が軽くなった帰り道、俺はバス停でバスが来るのを待っていた。それ程多くの人が乗るわけではない。俺と一緒に待っているのは数人と言うところだった。

と、目の前に、スモークガラスのカマロが止まった。何だか嫌な感じだ。

続いて何台かのちよつと古いアメ車がそのカマロに前後して止まった。

車から何人かの男が降りてくる。うわぁ、やばい。俺は逃げる間もなく囲まれていた。

「ボビーがあんたに会いたがつてる。一緒に来てくれ。」

言葉は普通だが、全身から殺気があふれている。絶対に銃かナイフを隠し持っていそうだ。

逆らったらこの場であの世行きだろう。

「わかった。」

俺は古いアメ車の後部座席に押し込められた。七十年代くらいのリンカーンだろうが、全体に四角くて、とにかくでかい。作りがゴツくて戦車のような。今の日本車なんかとぶつかったら日本車は一瞬で鉄クズだな。

当然のように俺の横にも一人乗ってきた。見張りみたいなもんだ。運転手席と助手席と俺の横に一人。揃いも揃って全身タトゥーだらけだ。よくもこれだけ悪そうな奴らが集まったもんだと思ったが、類は友を呼ぶという言葉もあるし、恐らく他の車に乗っている連中も似たりよったりだろう。

俺は一体これからどんな目にあうのか。

そんなことを考えているうちに頭が真っ白になった。周りの景色もまったく目に入らない。

気がついたらいっつの間にかタバコを吸っていた。そういえば、俺は緊張すると無意識にタバコを吸う癖がある。

車は方向的にはハリウッドの方に向かっていているようだ。だが、初めてのことで正確には全然わからない。妙に安全運転なのがかえって恐怖をそそるが、途中からどんどん寂れたエリアに入っていく。

やがて着いたところは殺風景としか言いようのないところだった。緑などは一つもなく、ボロボロという言葉がぴったりの家ばかりが

並んでいる。五軒に一軒は廃屋のように見える。舗装も荒れて道路もボコボコだ。こんなところは夜はもちろん、昼間だって歩きたくない。心なしか空気までが埃っぽいような気がする。

車はその中の一軒の家の前で止まった。どうやらここが目的地らしい。

「さあ、ボビーがお待ちかねだ。」

ああ、俺の人生もこれまでか。お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許しください。

「お前たち、手荒な真似はしなかっただろうな。」

ボビーは手下たちをじろりと見て言った。あの時は一瞬だったのだから、それほどちゃんと見ていなかったが、こうして明るいところで見ると、人間ってこんなに凶悪な顔になれるものかと思うほど怖い顔だった。

「ああ、何もしてないよ。黙ってついていた。落ち着いたもんさ。」

落ち着いていたんじゃない、恐ろしくて何もできなかっただけだ。

「でもこいつ、大したもんだよ。車の中で俺たちに囲まれても、平気でタバコ吸っていやがった。」

いや、あれは無意識に吸っただけだから。何も考える力がなくなっただけで、周りが見えていなかったの。

「そうか、大したもんだな。」

待つて。誤解しないでくれ。それじゃ俺、ふてぶてしい奴みたいじゃないか。今すぐに泣いて謝っちゃおうか。それでも許してはくれないだろうな。

俺はボビーと向かい合ったソファに座らされた。体に力が入らない。どさっと座り込んだ。

「よう、久し振りだな。あんたに会いたかったよ。」

俺は出来ることなら二度と会いたくなかった。

「この傷を見てくれ。あんたにやられた傷だよ。」

ボビーは左の額にある大きな傷を指差した。

それは、あんたが自分で転んでつけた傷だろう。俺は何もしちゃいない。いや、むしろ夜中に襲われた俺の方こそ文句を言いたいところだが、とてもじゃないが言えない。

「俺はあんなにあっさりやられたのは初めてだ。あんた、腕が立つな。」

だから勘違いだつて。どうしてみんなこうなんだ？

「それで、わざわざ今日来てもらったのはだな、どうだ、俺たちの仲間にならないか。」

仲間って……。俺に、ギャングの仲間になれと？無理！絶対無理！俺はそういうタイプじゃないし、そもそも俺は日本に帰らなきゃならない。

「どうした？何で黙ってる？気に入らないのか？分かった。あんたほどの腕があれば無理もない。なら、俺と五分の兄弟でどうだ？本当は最初からその積りだったんだ。」

冗談じゃない！こんな奴と兄弟なんかになれるか！何とかしなきゃ。俺は思い切って言ってみた。

「もし断ったらどうなる？」

「そしたらあんたにはここで死んでもらわなきゃならない。そうではないと示しがない。」

死ぬか、こいつと兄弟になるか。できれば他の選択肢も欲しかった。

「遅かったわね。どこに行つてたの？」

「ああ、ちよつとボビーの所へ。」

「はあ！？あなた、何言つてんの？」

俺はボビーの所に行つてからの一部始終を話した。途端にキャサリンは笑い出した。

「あはは。あのボビーがねえ。よつぽどあなたにやられたのがショックだったのね。でもすごいじゃない。これで、ハリウッドの半分はあなたのものよ。もう表を歩く時に回りに気を配らなくてもいいし。」

「じゃ、俺、日本に帰れるかな？」

「ああ、多分それは無理ね。きつとあなた、見えないところにボディガードがついてるわよ。おかしな動きをしたら、すぐボビーのところに連絡が行くわ。」

それじゃ、ボディガードじゃなくて監視役じゃないか。

「それに、近々ロミオのところと一戦交えるつて噂だから、手はいくらあつても足りないわ。きつとあなたも呼び出される。あなたくらい腕が立つ男なら、すごい戦力だものね。」

「ロミオとは？」

「ああ、ボビーとあなたがハリウッドの半分を持つているとしたら、後の半分为仕切っている男よ。元々は移民の子らしいんだけど、ここ数年で小さなグループをどんどん吸収して力をつけてきたわ。これまでボビーとはぶつからないようにしていたけど、最近縄張りを広げようとちよつかいを出してきてるみたいなの。ボビーも決着をつける気にいるみたいよ。」

参った。命を狙われているかと思つたらギャングの親玉と兄弟分になつて、今度は抗争か。俺、普通の人間なのに。なんでこんなこと

になっちゃったんだろう。神様つてのがいるとしたら、俺の運命で遊んでないか？

ボビーと兄弟になったことの効果はすごかった。

ハリウッドの街を歩いていても悪そうな奴は皆挨拶してくるし、道を開けてくれる。レストランやカフェで飲み食いしても請求書が来ないどころか、注文していないものまでどんどん出てくる。ギフトショップや洋服屋は自分の店に寄って行ってくれとうるさいし、靴や着るものも沢山プレゼントしてくれる。たまたま小さな揉め事がある所に出くわすと、俺の顔を見ただけで逃げて行く。いさかいの仲裁も何度か頼まれたし、余所者が暴れていたりしたらその対応にも呼ばれた。もちろん、その時は俺の「ボディガード」がどこからともなく現れてすべて片付けた。

何だか自分が強くて偉い人間のようにちょっとだけ気分がよかったが、でもそれは俺の力じゃない。周りの奴らが勝手に勘違いして俺を祭り上げてるだけで、本当のところは俺は何もしていないし、第一、俺は強くとも何ともない。分不相応な待遇でかえってむしろかゆい感じだったし、ここで偉そうにしてみようと、いざ化けの皮が剥がれた時にどんな目に合うか分からない。

俺の目に見える範囲にボビーの手下が顔を見せないことがせめてもの救いだった。どこに行っても金を払わせてもらえないのはしょうがないとして、せめて偉ぶらないでいよう。

ズルをしていい目を見ているような、半ば後ろめたい気持ちのまま二週間ほどが過ぎた。

ボビーがくれた携帯電話が久し振りに鳴った。

「今週の金曜日、ちよっとしたイベントをやるからトオルも来てくれ。」

ボビーの声だった。

「夜九時ごろに迎えの車をやるから。じゃあな、兄弟。」

来た。とうとう来た。イベントなんて言ってるけど、絶対嘘だ。ロミオとの抗争に違いない。

金曜日と言ったら明々後日じゃないか。どうしよう。どうしよう。

そんなところに行ったら、俺、死んじゃうよ。

不安な気持ちのまま金曜日が来た。

キャサリンのマンションの前に、見たことのある古いリンカーンが止まった。

「銃にだけは気をつけてね。」

キャサリンはあっさりと送り出してくれたが、どうやって銃に気をつけるというんだ。

大体、俺は本物の銃を見たことすらない。もちろん、弾の避け方も知らない。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、運転手は無言のまま車を出した。ひょっとしてこいつも緊張しているのか。

車は二十分ほど走って古い工場跡のようなところについた。暗かったし道には詳しくないので正確にはどのあたりかわからない。しかし、よくこんなところを見つけたなと思うくらい、大人数がこっそり集まるのにぴったりの場所だった。

中に入ってみると、数百人というのは大げさとしても、二百人近くは居るだろう。こんな沢山の人数で抗争をやるのか。話し声一つしないのがかえって不気味だった。

俺は前の方に通され、その集団と向かい合って立った。隣でボビーがにやりと笑った。

「さて、トオルも来てくれた事だし、今日の作戦を説明する。幹部は集まってくれ。」

十数人が前に出てきた。

「いいか、知つての通り、フランクリン通りの倉庫にロミオのチームが今日集まることになってる。どうせうちを潰すとかそういう相談に決まってる。奴らが来る前にこっちから出かけていって一気に叩き潰す。段取りは、マイク、お前が説明しろ。」

「作戦は簡単だ。奴らが集まる倉庫には表口と裏口がある。チームを三分の一と三分の二の二つに分けて、三分の一の方が表口から襲い掛かって騒ぎを起こす。奴らの気をそっちに引き付けてから、裏から残りの三分の二が突入して一気に挟み撃ちにする。」

マイクと呼ばれる男は参謀なのだろうか。それにしてもあまりにも単純な作戦だ。そんなことで本当に成功するのか？それより、今日のことは向こう側には漏れていないのだろうか。

心配する俺をよそに、ボビーが号令をかけた。

「よし、それじゃ行くぞ！」

俺たちは何台もの車に分乗して、時間差で出発した。沢山の車が一気に押しかけるのはまずい。中には金属バットや棒のようなものを手にしている奴もいるが、半分は手ぶらだ。きっとポケットにナイフや銃を隠し持っているに違いない。

俺はボビーの車に乗せられた。俺もボビーもほとんど口を開かなかった。タバコばかり吸っていた。

現場近くなると、いつの間に指示したのかごく自然に二手に分かれていく。

俺とボビーは表口の方に居た。

ロミオ達の居る倉庫からは見えない位置に車を止めて集まった。

「よし、じゃあ、まず一人が車で表口をあおる。注意を引きつけたところで一気に襲い掛かる。その方が騒ぎが大きくなるし、総攻撃をかけているように見えるから、挟み撃ちの効果が上がるだろう。誰かその役をやりたい奴はいるか？」

ボビーが周りの奴らの顔を見回すが、なかなか誰も名乗り出ない。
「俺が行くよ。」

俺は自分から手を挙げた。

皆一瞬びつくりしたような顔をしたが、考えてみたら車であおるだけだから、一番危険が少ないじゃないか。一度あおって、皆が襲い掛かったら一番後ろに隠れていればいい。

「皆、聞いたか。さすが俺の兄弟分のトオルだ。一番危ない役に自分から名乗り出てくれた。やっぱりこいつは大した男だぜ。」

え？ちよつと待って。この役、危ないの？俺、もしかしてとんでもない勘違いしてた？

今さら挙げた手を下ろすわけにはいかなかった。

「よし、じゃあ、このカマロを使ってくれ。カリカリに改造してあるから馬力がある。なに、奴らの目の前で一発スピンターンでも決めてやれば腰を抜かすさ。」

スピンターンなんてできないって。

「トオル、これを持って行け。」

ボビーが銃を取り出した。

「いや、要らない。」

持って行ったとしても、俺は銃の撃ち方を知らない。

それより、どうしようか。倉庫の前まで行ってクラクションを二、三回鳴らして逃げてしまおうか。この車は馬力があると言うから、結構スピードも出るだろう。そのまま真っ直ぐ走っていけばいい。そうだ、そうしよう。

ボビーが携帯電話で連絡を取っている。これからトオルが一番で切

り込んで、すぐに皆で騒ぎを起こす。始まって五分位したら裏から突っ込めとか言っている。

「よし、じゃあトオル、頼む。」

俺は半ばあきらめた。もう行くしかない。行つて、何とか一番目立たないところに逃げ込もう。

エンジンをかけて、ライトをつける。アクセルを踏み込む。

ものすごい音をたててホイールスピンする。おお、確かにすごいパワーだわ。でも、こんなに大きな音を立てたらやばいよ。目立つちやう。

少しアクセルを緩めると、車は走り出した。しかし、まだパワーが余っていて、後輪側を左右に振りながら進んでいく。

やばい、見張りに見つかったらしい。こっちを向いて何か叫んでいる。早いところ通り過ぎなきゃ。

うわ、いきなり銃を撃ってきた。そんなのありか？当たったら死んじやうぞ。

俺は頭を下げて隠れるようにして何とか車を走らせた。止まったらお終いだ。早く通り過ぎますように。心臓がドキドキしていた。

車にガクンと衝撃が走った。何だ？ハンドルが取られる。まずい、コントロールが利かない！タイヤを打ち抜かれたのか？

うわああああ！

車はそのままどこかに激突し、俺は気を失った。

どれくらい気を失っていたんだろう。時間の感覚がない。その前に、ここはどこだ？

起き上がるうとして、自分が車のハンドルの下にうずくまっていたのが分かった。

ぶつかった衝撃なのか、変な体勢でいたからなのか、体がちよつと痛かった。

何とか車から這い出てみると、どうやら俺が通り過ぎようとした倉庫の中らしい。

表が見えないまま走っていてコントロールを失って、そのまま倉庫に突っ込んだようだ。

何やらきな臭い匂いがする。後ろを見てみると火の手が上がっていた。

誰かが火を付けたのか？襲撃はどうなったんだ？それより、まずここを出なくちゃ。

「うう・・・。」

うめき声が聞こえた。誰かいるのか。声がした方に目を凝らしてみると、誰かが倒れている。

「おい、しっかりしろ。早く逃げないと焼け死ぬぞ。」俺は男に声を掛け、助け起こそうとした。

「足が挟まってて抜けないんだ。」鉄骨が何かの下敷きになっているらしい。

俺は近くから鉄の棒を見つけると、てこの原理で鉄骨を起こした。

「さあ、早く抜け。」

「助かった。感謝する。」

「よし、逃げるぞ。俺の肩につかまれ。」

俺たちはふらふらと出口へ向かった。

「おお、トオルだ。トオルが出てきたぞ！」

誰かが叫んだ。どうやら仲間らしい。

「トオル、大丈夫だったか。お、血が出てるじゃないか。どこか怪我は？」

「俺は大丈夫だ。それよりこいつを。足が折れてるかも知れん。」

「わかった。おい、しっかりしろ。あれ、こいつ、ロミオだ！おいみんな、トオルがロミオを生け捕りにしてきたぞ！」

ロミオって、相手方の大将じゃないか。

どうやらロミオの足は折れてはいないようだったが、その代わりに手足を縛られて車のトランクに押し込められた。

俺たちはボビーの家へと戻った。

途中、ボビーが、俺が気を失っている間のことを話してくれた。

「まったくトオルは無茶するよな。奴らをあおって注意を引き付けるだけでよかったのに、あの銃弾の雨の中をそのまま倉庫に車ごと突っ込んでいくし。奴らも慌てただろうけど、俺たちも焦ったぜ。

急いで倉庫に飛び込んでみるとトオルはもう居ない。一人で切り込んで行くなんて信じられないよ。だが、おかげで襲撃は大成功だ。

おまけにトオルはロミオまで捕まえてきてくれた。まったく今回の成功は全部あんたのおかげだよ。見ろ、あんたに不信感を持っていた奴らもすっかりあんたに参っちまったようだ。ま、カマロは潰れちゃったけど、あんたにはキャデラックでも用意しなきゃならないな。防弾ガラスの。」

ボビーはそう言うとは大笑いした。

なるほど、そういう事があったのか。なんて、納得してる場合じゃない。命が助かったからいいようなものの、ちよつと間違えたらあの世行きだった。危ない危ない。もうこんな抗争とかはごめんだな。「ところであのカマロ、あの倉庫に置いてきたままだけど大丈夫なのか？」

「ああ、そうだな。じゃあ、トオルからキャサリンに一言言つてくれよ。」

「キャサリンに？何でキャサリンに言うんだ？」

「何でって、お前、ひよつとして知らないのか？まあ、言つてくれればキャサリンがうまくやってくれるよ。詳しくは直接聞いたほうがいい。」

ボビーの家に着くと、ロミオが縛られたままりビングに引っ立てられてきた。

「さて、どう痛めつけてやろうか。」

ボビーが凶悪な目で睨みつける。

俺は口を挟んだ。

「もう勝敗は着いてる。血生臭いことはやめてくれ。」

「しかしなあ、トオル、こいつはこれまで散々俺にたてついてきた奴なんだ。きつちりけじめをつけないと示しがつかない。」

その時、ロミオが口を開いた。

「待て。俺は殺されても仕方ないが、ちょっと俺の話を聞いてくれ。」

「命乞いなら聞かん。」

「そうじゃない。ちよつとだけ、その男・・・トオルって言つのか、トオルに話をさせてくれ。」

「・・・話を聞こう。」

このまま放っておいたらこの男は殺される。いくら何でも目の前でそれを見たらさすがに寝覚めが悪い。

「あんたみたいな滅茶苦茶な男は初めて見たよ。今回はあんた一人にやられたようなもんだ。でもあんたは俺を助けてくれた。あのままだったら焼け死んでいたところを、敵だった俺の命を救ってくれた。あんたにはしびれた。かなわないと思ったよ。で、どうだ。あんたに救われた命だ、あんたのために使わせてくれないか。」

「俺のためには？」

「俺はあんたの下につくよ。あんたのために働く。こう見えても俺もハリウッドの半分を仕切っていた男だ。役に立つぜ。」

「ちよつと待てよ。順番が違うんじゃないのか。」

ボビーが口を挟んだ。

「俺とトオルは五分の兄弟だ。ロミオ、お前がトオルの下につくという事は、俺の下につくということでもあるんだぞ。」

「勘違いするな、ボビー。俺はお前の下にはつかないよ。俺とお前の力はいい勝負だ。今回だってトオルがいなかったらどうなっていたか分からない。だけど、お前にだって分かっているはずだ。トオルは、俺たちとは器が違うのさ。」

ボビーは黙り込み、しばらくたってやっと口を開いた。

「わかった。俺もトオルとの杯を直して、トオルの下につくことにする。そしてロミオ、お前とは五分の兄弟になる。それでハリウッドはトオルの下に統一される。俺とお前もいつまでもいがみ合っているわけには行かない。このままじゃ共倒れだ。そうなったら他の地域の奴らが一気にハリウッドに入り込んでくる。それだけは避けたい。」

ナイフが持つてこられ、それぞれが腕に軽く傷をつけて血を出す。傷口を付け合つて血を合わせて儀式は終了した。

「トオル、これであんたがハリウッドのトップだ。」

「よろしくな、トオル。」

いつの間にか話が進んでいた。俺が？ハリウッドのトップ？なんでそういう話に。俺なんか居なくなつて、お前達二人でやって行けるだろう。だいたい、俺なんかが、お前達みたいな凶悪な奴らの上に立てるわけがないじゃないか。

言いたいことは山ほどあつたが、思つた通りにしゃべれるほど英語がうまくはない。何も言えないまま既成事実として成立してしまつた。俺、どうなつちやうんだろう。奴らの話から想像すると、他の地域のギャングとかに狙われたりしないんだろうか。とりあえず、ボデイガードを増やしてもらわなきゃ。

「無事に帰つてきたわね。安心したわ。」

俺の顔を見るとキャサリンはほつとした顔をした。

「で、どうだったの？」

「うん、倉庫に車を置いてきたままだからよろしくつてボビーが言つてた。」

「何、それ？」

「キャサリンに一言言つと大丈夫らしいよ。」

「あなた、話を端折り過ぎ。ちゃんと順を追つて話してよ。」

俺はゆつくりと順を追つて話した。ロミオを連れてきてからのくだりで、キャサリンは目を丸くした。

「あなた、すごいじゃない！今まで誰も出来なかつたハリウッド統一をやつてのけたのよ。これであんたはハリウッドの帝王つてことよ。さすが、私が見込んだ男ね。わかつたわ、車の事と倉庫の火事の事は何とかするわ。あんたは何も心配しなくていい。」

「何とかするつて、どうするんだ？」

「車は無かったことにするし、倉庫の火事もホームレスの火の不始末か何かって事にするわ。」

「そんなことが出来るのか？ いったいどうやって？」

「ハリウッドの警察のお偉いさんに知り合いがいるのよ。ちょっと頼めば何とかなるわ。」

いくらアメリカがいい加減な国だと言っても、そんなことが通用するものだろうか。

倉庫が火事になって、銃弾の跡があつて、潰れた車が放置されているんだ。その車だつて、もしかしたら盗難車かも知れない。あの騒ぎを誰かが見ているかも知れない。

それを揉み消すなんて無茶だ。どんな知り合いが知らないが、簡単ではないだろう。

ひよつとして賄賂を積むのかな。それにしても結構な額が要るだろう。

それをこんなに簡単に言つてのける・・・キャサリンは一体何者なんだ？

それから俺の生活は結構変わった。

まず、新車のキャデラックが来た。もちろん防弾ガラスだ。ボビー曰く、“車の下に爆弾を仕掛けられても大丈夫”くらいボディも強化してあるらしい。左ハンドルで右側通行にはまだ慣れないので殆ど乗っていないけれど。

あとは、俺名義の、クレジットカードとATMカードを兼ねたカードが来た。

もちろん俺は銀行口座なんて持っていないし、単なる一旅行者俺が持てるはずのものではない。これはロミオがくれた。銀行のATMで確認してみると、三十万ドルくらい入っていた。しかも、使った分は自動的に補充されるらしい。

組織の方も落ち着いていた。実際俺は何もしていなくて、ボビーとロミオの合議制でやっているようだが、結論が出ないときだけ俺に話がある。

ハリウッド内に居た小さなグループも次々に投降し、ハリウッド全体がほぼ一つにまとまった。いくつかの近隣のギャングからも連絡があり、友好関係を結んだりした。

こう書くといい事のようにだが、実際はどんな悪いことでもやる奴らがただ集まっているだけのこと、けして街が平和になったわけではない。

一つだけ俺は組織に注文をつけた。それは、ドラッグを扱わないこと。

それを主たる収入源にしている奴らも沢山居たから、当然不満の声も上がったが、俺は力づくで押し切った。と言っても実際押し切ったのはボビーとロミオだが。

俺達の組織は恐怖と暴力の上に成り立っているわけで、それは十分

分かってた。人を泣かせることで収入を得ていると言ってもいい。日本のヤクザのように任侠なんて存在しないし、金さえもらえば自分の親でも手にかける、と言う奴がごろごろしている。まあ、そんな奴らはいつかどこかで殺されちゃうだろうし、そうでなくても刑務所に行くのが関の山だ。

だが、ドラッグをはびこらせたら一般の人達にまで売ることになるだろう。こいつらギャングが自分でやって廃人になるのは自業自得だが、一般の人はそうではない。金だけでなく、その人の人生すべてを奪うことになる。いつか俺はここから逃げ出すだろうから、せめてそれまではドラッグフリーにしたかった。

そう言う感じで表向きは平和に暮らしていた俺だが、いまだにパスポートがなかった。

帰りのチケットはとづくに期限切れになっていたが、それは金さえ払えば何とかなる。今の俺ならファーストクラスでも買える。

しかし、アメリカに來ている外国人にとって、身分を証明できるものは唯一パスポートだけなのだ。それがないともちろん日本への飛行機にも乗れないし、例えばアパートを借りようにも何も身分を証明するものがない。車の免許すら取れないのだ。

パスポートを取るために日本から謄本を送ってもらったり、日本国領事館に行って一時渡航許可証をもらう手もあったが、俺は少しここの生活が気に入ってきていた。何しろ俺は日本に帰ったら失業者だ。ここに居たら、ちよつと怖いけれど、何もせずにはぶらぶらしてられる。一切金の心配もしなくていい。将来のことは心配だけれど、とにかく楽なのだ。

そんなある日、キャサリンが話しかけてきた。

「ねえトオル、あなた、ずっとアメリカに居るんだつたら永住権取る？」

「グリーンカード？取れるもんなら取りたいけど、いろいろと難し

いんだろ？時間もかかるっていうし。」

「トオルがその気なら取ってあげるわよ。私、移民局にもちよつと顔が利くの。」

「ふうん。それなら任せるけど、大丈夫なの？俺、捕まって強制送還とかにならない？」

「ならないわよ。この国の移民局はそんなに優秀じゃないわ。」

「書類とか、何を用意すればいいの？弁護士も探さなきゃならないだろう。」

「とりあえず何も要らないわ。申請用紙は私がもらって来るから。書き方も私が教えてあげる。」

三日ほどしてキャサリンが永住権の申請用紙を持ってきた。

厚みが全部で二センチくらいありそうな分厚い書類だった。見た瞬間、これを書くだけで一ヶ月くらいかかるんじゃないかと思った。

分からないところはキャサリンが教えてくれるだろうからいいものの、これを自分でやったとしたら、読むだけで一年くらいはかかるかも知れない。

「じゃあ、ここに名前と住所を書いて、一番下にサインして。」

俺は言われたとおりに書いた。

「これでいいわ。移民局に出しておくわね。一週間くらいで呼び出しがあると思うから。」

はい？その分厚い書類は何だったの？と言うか、名前と住所とサインだけで永住権を申請出来るわけがない。それに一週間って・・・ありえない。

ところが一週間後、本当に移民局から呼び出しが来た。

そして、そこで俺はキャサリンの正体を知ることになる。

「さあ、行きましようか。」

キャサリンの赤いBMWに乗り込んだ俺達は、フリーウェイ101号線を南に向かった。

ハリウッドエリアから外にはあまり行ったことがないが、今日は移民局に永住権グリーンカードの面接に行くために早起きをした。

キャサリンは白いワンピースにゴールドのネックレス、バッグも白に金のワンポイントだった。ふちの赤い大きなサングラスをしていて、見るからに涼しげだ。

俺は薄いブルーグレーのスーツを着ていた。さすがに移民局の面接にジーンズとTシャツで行くわけにも行かず、仕方がなく一着作ったのだ。

まだ通勤ラッシュの前なのだろう、フリーウェイは空いていて、二十分ほどでロサンゼルスロサンゼルスのダウンタウンに着いた。近くの駐車場に車を停めて、移民局の建物に向かって歩いた。

建物の前に着くと、まだ7時を過ぎたばかりだと言うのに沢山の人々が並んでいる。ラテン系が多いようだ。

「ちよつと早かったかしらね。」

キャサリンは時計を見ながら言った。確か約束は七時半だから、あと十五分くらいはある。俺が列の後ろに並ぼうとすると、キャサリンはさっさと入り口に向かって歩いていく。

「おいおい、皆並んでるんだから俺達もちゃんと並ばないと。」

「いいのよ、あの人は半分以上はこれから申請するために書類を出しに来た人達だから。それに、私達が行くところはあの人達が行くところとは違うの。お腹が空いてきたから、早く済ませちゃいましょうよ。」

キャサリンはそう言うと、入り口に立っている警備員に言った。

「局長のミスター・ロバート・オーウェンに取り次いでくれるかしら。キャサリンが来たと言ってくれば分かるわ。」

五分後、俺達は移民局の局長室に通されていた。

「グッドモーニング、ロバート。ご機嫌いかが。」

「これはこれはマダム・ハリウッド。こんなむさ苦しいところへようこそ。」

「今日はプライベートだから、その呼び名はやめてちょうだい。」

マダムハリウッド？

「で、この男が君の言っていた“彼”かね？」

「そうよ。彼はいろんな意味で今のハリウッドになくてはならない男なの。だから、永住権を取りたいのよ。」

「わかってるよ。他ならぬ君の頼みだ。最優先で手続きするよ。写真と指紋だけは置いていってくれ。写真室は三階、指紋は地下の一番奥の部屋だ。封筒に入れて受付に渡しておいてくれればいい。」

「わかったわ。じゃ、よろしくお願いね。」

キャサリンはそれだけで席を立った。

部屋を出る前に俺はロバートと握手する時、こう言われた。

「おめでとう。二週間もすれば、君は合法移民だ。」
リーガル

写真と指紋を取って受付に渡し、俺達は移民局の建物を出た。

「お腹が空いたわ。何か食べていきましょよ。この先に、ブリト一の美味しい店があるの。」

着いた所はキャサリンの白いワンピースには似つかわしくない、屋台に毛の生えたようなお世辞にも綺麗とは言えない店だった。店の看板には「Kosher Style」と書いてある。どんなスタイルなのかよく分からないが、俺達を買ったブレックファスト・ブリトーはとにかくでかく、重かった。縦横七センチ、長さは二十センチくらいもある。朝からこんなに食べられるものだろうか。なるほどアメリカ人は大きいわけだ。

空いている席に座ると、一口かじってみた。

中にはスクランブルエッグ、ハム、玉ねぎ、ソーセージ、チーズ、メキシカンライスなどがぎっしり入っていて、トルティーヤの皮も二重になっている。これを全部食べられたら、昼ごはんは食べなくてもよさそうだ。

「驚いたでしょ。」

「ああ、こんなブリトーは見たことがない。しかも、美味しいよ、これ。」

「おまけに、安いのよ、ここ。」

キヤサリンはコーラを飲みながら話した。俺は、このブリトーに炭酸を合わせるとひどい目に合いそうだったのでコーヒーにした。

「トオルには話さなきゃならないと思ってたんだけど。」

「うん？」

「私の仕事のこと。」

「ああ、それは興味があるな。さっき移民局の局長が言っていた“マダム・ハリウッド”のこととか。君は一体何者なのか、教えてくれよ。」

「短く言うとね、私は高級コールガール組織の経営者なの。」

「コールガール組織？」

「それも、一流の顧客を持った、ね。私の顧客にはハリウッドの有力者とか、役人とか、有名な映画監督やプロデューサー、俳優なんかも沢山いるわ。ハリウッド警察の上の方は皆私の顧客だし、さっきの移民局の局長もそう。国会議員にも顧客がいるわ。もちろん私自身は体売らないけど、ハリウッドにいる女の子達の中には、お金が欲しかったり、権力に近づきたかったり、チャンスが欲しかったりする子が沢山いるのよ。そういう子達と、立場があっておおっぱりに遊べない人達を結び付けてあげるのが私の仕事ね。パーティーや接待に女の子を派遣することもあるわ。」

「なるほど、それで合点がいったよ。この間の車と火事の件といい、

今日の事といい、全部君の“力”ってわけだな。」

「そうよ。気に入らなかつた？」

「いや、大いに助かったよ。ありがとう。と言うか、俺は最初の日から君に助けられてばかりだな。感謝してるよ。」

「うっん。あなたは私が見込んだ男だもの。ねえ、考えてみて。あなたがハリウッドの裏社会を仕切る帝王だとしたら、私はハリウッドの夜を司る女王ってところね。私達二人一緒なら、大概のことは出来るわ。」

「そうか、すごいな。」

「またそんな、他人事みたいに。」

「まあいいじゃないか。今のままで結構普通に楽しくやってるんだから、このままでいようよ。わざわざ面倒を起こすこともないじゃないか。」

「まったくあなたらしいわね。」

俺達は声を合わせて笑った。

永住権も無事に届き、俺は平和な毎日を過ごしていた。

「永住権って“グリーンカード”って言うけど、緑じゃないんだね。」

「いつの時代の話？昔は緑色のカードだったらしいけど、その後ピンク色とかになって、今のカードになったって聞いたわ。」

俺とキャサリンはハリウッド大通りにあるカフェで遅い朝食を取っていた。

チャイニーズアターから二ブロック西に行ったところにあるオーブンテラスの店だった。

トーストにハッシュブラウン、卵を二個使ったオムレツとカリカリベーコン、それとコーヒー。絵に描いたようなアメリカの朝食だ。

ポカポカとした陽気が心地よかった。

食事を食べ終わり、コーヒーをおかわりしてくつろいでいた時のことだ。

目の前に一台の車が止まり、するすると窓が開いた。

「死ね！トオル！」

パン、パンと、何回か乾いた音が響く。

耳の横の方に焼けたような熱さを感じる。

キャサリンの悲鳴が聞こえる。

鉄が焼けたような匂いがした。

男達が怒号を上げ、車とバイクが十台ほど飛び出していく。

「逃がすな！絶対に捕まえる！」

誰かが叫ぶ。

一瞬何が起こったか分からなかった。

が、それもすぐにわかった。俺は銃で撃たれたのだ。

幸いにも俺の体には当たらなかったようだ。

だが、キャサリンは？俺のすぐ隣にいたキャサリンは？

「キャサリン。大丈夫か。」

「私は大丈夫。だけど、これを見て。」

キャサリンのバッグが銃弾で撃ち抜かれていた。

ちよつとそれしていたら、キャサリンに当たっていたかも知れない。

俺はともかく、彼女の命までが危ないところだった。こんなことをする奴は許すわけにはいかない。

俺は頭に血が上るのを感じた。

最近はずっと平和に暮らしていたし、このままでいいと思っていたが、やはり俺はそういう世界に身を置いているのだ。

俺達にこんな事をしたらどういうことになるか知らしめなければならぬまい。

しばらくして、俺を撃った車を追いかけていった奴らが帰ってきた。

「すまん、トオル。逃げられた。まだ何人かあたりを探してる。」

「お前達、車種と色は覚えてるだろうな。ナンバーは見たか？」

「ナンバーは半分しか見えなかった。でも、車種は覚えてる。」

「よし、お前ら、ボビーとロミオに言っ、三十分以内に全員を集める！一人残らず全員だ！」

俺達は警察が来る前にそこから離れた。

連絡を受けたボビーとロミオはすぐに俺達のところにやって来た。

「トオル、大丈夫だったか？」

「どこのどいつだ、こんなことしやがったのは。」

「それは分からん。だが、俺はちよつと考えが甘かったようだ。うちは所帯もでかいし、こちらが侵略しなければ抗争になることはないと思っていたが、こんなことをされるんじゃあ、俺達に手を出したらどういうことになるかきつちり見せてやらなきゃならぬだろう。」

やがて全員が集まった。裏通りの駐車場とは言え、こんな街中で全

員が集まっていたら、遅かれ早かれ通報される。

ボビーとロミオが状況を説明し、さっき犯人を追いかけて行った奴が車の特徴などを説明している。

いつもならそこで解散となるところだが、今回はあえて俺が皆の前に出て話した。

「いいか、お前達。何が何でもポリスより先に犯人を見つけて俺の前に連れて来い！この落とし前はきっちりつける。俺達に手を出したらどういうことになるか、思い知らせてやれ！」

自分でもびっくりするほど大きな声が出た。よほど頭に血が上っていたのだろう。

そして俺の声より何倍も大きな、男達の叫び声が返ってきた。俺もとうとうこの世界に染まってしまった、そう思い知った。

三日後、情報屋と呼ばれる男が手がかかりを持ってきた。

「トオルを襲ったのは、どうもバーバンクの奴らしい。奴ら、前からちよこちよことハリウッドに出てきてドラッグをさばいていたんだが、トオルが頭になって以来ドラッグが売りさばけなくなったもんだから、トオルを消そうとしたようだ。あわよくば、そのままハリウッドに入り込む気だぞ。」

「その情報は確かか？」

「ああ、奴ら、最近何だかきな臭い動きをしていたし、あちこちに飛ばした俺の“目”が確かめてきた。」

「よし、何人か人をやって、間違いなかったら犯人を特定してさらって来い。」

「もう行ってる。」

しばらくして、問題の車を発見したと電話が入った。

「この車に間違いはない。色も車種も年式も合ってるし、ナンバーの半分も一致する。乗ってる奴もバーバンクのメンバーだ。」

「気づかれるな。そいつが一人の時を狙って、こっそりと連れて来い。ただし、絶対に殺すな。出来れば無傷で連れて来い。」

夜まで待つて、ようやく「そいつ」が連れてこられた。何発か殴られているようだが、それ以外は無傷のようだ。

「そいつ」は俺の前に手錠をかけられ、縄でグルグル巻きにされた姿で連れてこられた。ふて腐れたような表情をしていて、もう抵抗もしない。

「お前、名前は？」

「ヘンリーだ。」

あの時の声と重なり合った。こいつで間違いはない。

「お前、組織に命令されて俺を狙ったんだな。」

「いや、俺一人でやったことだ。あんたを殺れば俺の名が上がり
思った。」

「見え透いた嘘をつくな。お前みたいなチンピラがそんな事を出来
るわけがない。」

「うるさい！いいから早く殺せ！」

チンピラの典型的な切れ方だ。強がっているが、内心ビビッている
に違いない。俺はニヤリと笑った。

「簡単に死ぬると思うな。お前は俺の命を狙ったんだ。お前にはこ
れから死ぬより辛い目にあってもらう。おい、こいつをしばらく監
禁しとけ！」

男が連れ去られた後、こいつを出来るだけ傷つけないように、メシ
も食わせると指示した。

ボビーやロミオからはすぐに始末しようと不満の声が上がったが無
視した。

その間に、バーバンクの奴らを叩き潰す準備は着々と進んでいた。

俺は、今回は作戦云々ではなく、正面から叩き潰すと宣言していた。
そのためか、いつもより多くの銃が集まり、どこから手に入れたの
かマシンガンまであった。

前回のロミオとの抗争以来始めての戦いとあって、皆気合が入って
いるようだ。

ヘンリーを捕まえたと言う噂を流しておいたから、バーバンクの奴
らも同じように準備をしているに違いない。今回は力と力のぶつか
り合いになる。

今回の抗争で、俺にはもう一つ目的があった。

奴らがこれ以上ドラッグを扱えないようにするつもりなのだ。せつ
かくハリウッドからドラッグを追放したのに、他の地域の奴らに持
ち込まれたのでは意味がない。

もちろんバーバンクを潰したところですべてのドラッグを駆逐できるわけではないのは知っている。しかし、一つ一つでも潰していけば、そしてそれを外に示せば、ハリウッドには段々ドラッグが入って来なくなるだろう。少なくとも一般市民には。

そのために情報屋に金を使わせた。

自分の“目”の他にも、他の地域の情報屋に金を渡して情報を買い集めさせたのだ。

その結果、面白いことが分かった。

奴らはドラッグの工場と倉庫を持っているのだが、それらはそれぞれ街の端と端にあるのだ。

工場で精製して倉庫に保管する。運んでいる途中に見つかる可能性もあると思うのだが、どちらか一方が見つかった時でももう片方が生き残るという目論見なのだろう。

よし決まった。今回はこの両方を二度と使えなくする。

近隣の有効団体からも協力の申し出があった。

バーバンクの奴らのやり方が気に食わないのだろう、結構な数が集まってくる。

同様に向こうも他の団体を集めているかもしれない。

と言うことは、今回の抗争は、ロサンゼルス北側のギャングを真っ二つに分けての戦いになると言っている。

これだけ話が大きくなると、どこからか情報も漏れていくだろう。準備にあまり時間をかけるわけにはいかない。

いよいよ決行日が来た。今日の戦いは恐らく新聞でもテレビでもトップニュースになるだろう。それぐらい大きな戦いだ。ロサンゼルス暴動以来、こんなに大きな騒ぎはなかったはずだ。

ポリスとやり合って体力を消耗するのは出来るだけ避けたいので、キャサリンに言って警察の警戒を緩めにしておいてもらった。その代わり、こちらからもちよつとした情報を渡しておいた。警察に借りを作りたくないし、キャサリンの立場も悪くしたくない。

情報は集めるだけでなく、うまく使えば武器にもなる。

俺を狙った奴の情報を集めた時のルートを使って、今度は逆に情報を流した。

今日俺達がバーバンクを襲撃することは奴らに伝わっているはずだ。奴らもそれなりの準備をして待ち構えていることだろう。

ただし、奴らには、バーバンクには真ん中のアラメダ通りから入るということにしておいた。

もちろんこれは嘘だ。

今回の戦いは奴らの縄張りが戦場となるので、まともに行っては当然奴らに有利になる。

通りが広いアラメダなら信憑性があるし、奴らと正面衝突するにはうってつけに見える。

しかし実際は北側のウェスト・ビクトリー通りから入る。

奴らが俺の流した情報を半分しか信じていなかったとしても、わざわざ遠回りになるウェスト・ビクトリー通りを使うとは思わないだろう。

「トオル、そろそろ行こう!」

ロミオが声を掛けてきた。

一瞬だけ迷った。

これまでは何となく巻き込まれたり、向こうから仕掛けられた戦いだった。だが、今回は初めて俺が自分から仕掛ける争いだ。

この争いに行ってしまったら、俺はもう普通の世界には戻れないかもしれない。

今ならまだ引き返せる。引き返して日本に帰れば、あとは何事も無かったかのように以前のような普通のサラリーマンに戻るかもしれない。

ひよつとしたきっかけでこんな所まで来ちゃったけれど、ここが分かれ目かも知れない。

しかし、もうどうにもならなかった。

俺は声の限りに叫んだ。

「行くぞ！気合入れて行け！」

何十台もの車やバイクが、ハリウッドから一斉に北を目指す。地響きのような音を立てながら。表向きはちょっとスピードが出ている程度だが、どの車も定員一杯に乗り込み、武器を携えている。目立つなと言う方が無理だ。

バイク隊が先に出て交差点をふさぐ。

信号などお構いなしに全車両が列をなして進んでいく。その通り道は一時であるが俺達に蹂躪された。

バーバンクには予定通り、北側のビクトリー通りから入っていく。

俺は皆に指示を出した。

「まず街の北側のドラッグ工場を叩く。徹底的に叩き潰せ！」

工場は街外れの使われていないビルの下にあった。今日の戦いに備えたのだろう、見張りが十人程度いるだけだ。

突然現れた大人数の俺達に、十人程度の見張りが抵抗するはずも無い。俺達の姿を見るとすぐに逃げ出した。恐らく本体に連絡するだろうから、すぐに奴らもこちら側に向かうことだろう。

工場のドアを叩き破ると、俺はまずいきなりマシンガンをぶっ放した。マガジンが空になるまで打ち続けた。それは、今までの生活に別れを告げる花火のようだった。

あとは、とにかく二度と工場を使えないように、全部壊した。最後に火をつけた。これでこれも終わりだ。

「よし、このままバーバンクの奴らを叩くぞ！」
勢いに乗った俺達は街の中心へと方向を変えた。

「トオル、街の反対側の倉庫はどうするんだ？あそこも潰さないと、奴らはまたドラッグをさばき出すかも知れないぜ。」
ボビーがたずねてきた。

「大丈夫だ。向こうの倉庫は今頃ポリスの手入れにあってるよ。」
そう、俺は今日のポリスの警備を緩くしてもらう代わりに、奴らのドラッグ倉庫の場所を警察に教えておいたのだ。

工場さえ潰してしまえばもうドラッグは精製できない。倉庫にあるものを警察に処理してもらえば、奴らのドラッグもお終いと言うわけだ。

そうこう言っている間に奴らが集まっている姿が見えてきた。予想外の方向から予想外の展開で俺達が現れたから、浮き足立っているに違いない。

あとは本体さえ叩いてしまえばバーバンクも壊滅となる。

街に平和は来ないだろうが、少なくともこの辺のドラッグはなくなるだろう。

勝負はあつという間についた。本当にあつさりをついた。

奴らはドラッグを売ってもいるが、自分達で打っている奴も多いのだらう。そんなジャンキーどもに、組織化された俺達が負けるわけがない。

奴らのトップクラスの何人かは手足を縛って転がしておいた。

倉庫を片付けた後のポリスが拾いに来てくれることだらう。

帰ってきて翌日、監禁していたバーバンクのヘンリーを解放した。

それも、まったくの無傷で。

俺を直接狙った奴なので殺してしまえと言う意見が多かったが、俺は連中に諭した。

「考えてみる。殺すのは簡単だが、あいつが俺達に捕まったのはバーバンクの奴らも知っていたはずだ。それが、無傷で帰るんだ、何かあると思うのが普通だらう。バーバンクに帰っても、ヘンリーは裏切り者と見なされる。放っておいてもバーバンクの残党の奴らが始末してくれるよ。でなければ、ヘンリーはもうこの界限には居れない。追っ手の影にビクビクしながら逃げ回って暮らすのさ。元の仲間にやられるか、一生ビクビクして暮らすか。それは死ぬより辛いだらう。俺を狙って、キャサリンを危ない目にあわせたんだ。簡単には死なせない。」

「あんなにキレたトオルは初めて見たって皆言ってたわよ。」

俺はキャサリンとドライブに出ていた。今日はメキシコのティファナ辺りまで行ってみようかと思っている。

「ああ、奴らは俺ばかりではなく、君まで危ない目に合わせたからね。それに、ドラッグを扱っているのが気に入らなかった。」

「どうしてそんなにドラッグを目の敵にするの？もちろん、ドラッ

グは良くないけどさ。」

「うん、実はね・・・」

俺は親友の話をした。

奴とは中学高校とずっと仲が良かった。

どちらかというと俺は目立たない方、奴はいわゆる不良だったが、不思議とウマが合った。

周りからはどうして俺達が仲がよいのか不思議がられていたが、結構いい奴だったのだ。

高校を出てからは別々の道に進んだので余り頻繁には会わなかったが、ある時から奴の様子がおかしくなった。

気づいた時には奴はドラッグ中毒になっていた。好奇心から手を出して、俺が気づいた時には自分の意思とは関係なく抜け出せなくなっていたのだ。

今でも奴は病院にいるが、廃人同様になっている。

親友を奪われたのもあるし、人間の尊厳そのものを奪うドラッグを俺は憎んだ。

もちろんただの会社員だった俺が日本で何か出来るわけではないが、今回はハリウッドの仲間達もいた。

「ふうん、そんなことがあったんだ？」

「ああ、今でも、何でもっと早く気づいてやれなかったのかと悔やんでるよ。」

「ねえ、国境の手前で車を停めて、メキシコに入ったらタクシーでエンセナダまで行きましようよ。美味しいシーフードの店があるの。」

「

それからハリウッドに平和が来た。

と言いたかった。

ところが、自分で持っていた一線を超えてしまった俺は、自分の居場所を見つけられなくて悶々としていた。

立場的にはハリウッドのトップだし、バーバンクも制圧したし、近

隣のギャング達とは友好関係にあるか、傘下に収めている。いわば、北ロサンゼルスのおトップと言ってもいい。ただそんな立場が俺にはむず痒かった。

今では街のどこにでも顔は利くし、金もいくらでも入ってくる。困ることは何一つない。

だけど、基本的に俺は元々普通の会社員だったのだ。

それが、何の間違いかトントン拍子にこっちの世界で出世してしまった。それも、たまたま旅行中のアメリカのハリウッドで。

俺に言わせれば、俺は迷子になっているようなものだ。ひょいと路地に入り込んでそのまま奥に進んでしまい、いつの間にか出口が分からなくなってしまった。自分が今どこにいるかもわからない。だけれど何とかそこには居られるし、余り困っていない。

でも、本来自分が居るべきところから外れてしまっているし、元の世界で俺を知っている人達はどうしているのだろうか。

居心地のいいような、悪いような状態で、自分の意思と関係なく進んでしまっているけれど、元の道にいつかは帰れるんだろうか。できればこれ以上迷路の奥には進みたくないんだが。

「トオル、青い奴ら（ベニスビーチ）から友好関係の申し出が来るぞ。」

「さて、奴らは赤い奴ら（もう一つのベニスビーチ）との対立が激しくなってるから、関わりとやばいぞ。」

「いや、赤い奴らは黒い奴ら（メキシコ系）とも最近組んでるようだし、青い奴らは元々卑怯な奴らだ。近づくなら赤い奴らの方がいい。」

「いつそ奴らの対立をあおって、共倒れさせる手もあるぞ。」
「やれやれ、また始まった。」

俺はこれからどこに行ってしまうのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8355d/>

「ロスト・イン・ハリウッド」

2010年11月9日05時35分発行